

至上の印象派展 ビュールレ・コレクション

国立新美術館 2018.02.14~05.07 福岡・名古屋 巡回

スイス・チューリッヒの「ビュールレ美術館」(1960年オープン)は、実業家・美術収集家の「エミール・ビュールレ氏」の個人コレクションで、印象派作品を中心に収蔵点数「200点余」と世界屈指のコレクションを有し、その質の高さが特筆されることで美術館の存在が世界的に高く評価されている。

しかし、2008年に4枚の名画が盗難に遭遇する事件が発生し、一般公開が制限されるようになり、コレクション全体が「チューリッヒ美術館」へ移管(2020年予定)が決まり、その間貴重な作品の一部が貸与され日本で公開されている。モネ：《睡蓮の池 緑の反映》(1920~26年頃 油彩/カンヴァス)部分



画伯は、自身のアトリエから睡蓮の池を眺められるようにして数多くの「睡蓮の池」シリーズを制作しているが、この数年かけて制作した横幅8mを超える晩年の逸品は、“まだ見ぬ「睡蓮」がありました”と紹介されている。今回スイス国外に初めて貸し出されるこの作品は、柔らかなピンクに放たれた花卉がアクセントとなり、また光の反射により、水面に幾重にも重なり合うグリーンとブルーの深みが見事に写し出された「モネ芸術の真骨頂にして最高傑作である」と評価されている名作品である。

ルノアール：《イレヌ・カーン・ダンヴェール像の肖像》

(1880年 油彩/カンヴァス)



印象派の巨匠の画伯が手がけた肖像画の代表的な作品のひとつで、モデルは裕福な銀行家の娘の可憐な8歳少女で、明るい光を上方から受けて、軽快に浮き出て清潔で上品な顔立ちの中で輝く大きく印象的な瞳、子供特有の白く透き通る肌を描写した絵画は“**絵画史上最高の美少女**”とされている。

作品の注目点は、当時流行の長く伸びた肩から腰まで垂れた波打ち気味の長い赤毛の頭髮で、個性的を感じさせる流形的な筆触により髪の本一本が輝きを帯びているかのように繊細に表現されていることである。